

新丁重語の「なります敬語」

——《なる》の観点から——

黒 滝 真理子

1. はじめに

「お世話になっております」という言葉でビジネスメールを始める人は多いであろう。この表現は「私はあなたにお世話をしてもらっています」を意味するが、受益者である「私」も、主体である「あなた」も明示されていない。日本語の敬語は、このように誰から誰への行為であるかを曖昧にして使われることが多い。

日本語を運用する際、敬語だけで人間関係を円滑にする戦略は担保できるのであろうか。敬語はあくまでも上下関係をベースに「タテ」社会を意識した言語形式に過ぎないので、それだけでは不十分であろう。インタラクションにおいては親疎関係をベースに「ヨコ」社会を意識した配慮表現を駆使する必要もある。この「ヨコ」社会を意識した配慮表現の一例に、《なる》を使った「なります敬語」がある。

「なります敬語」は近年、社会的にも「正用」・「誤用」・「一部誤用」などと議論される表現であるが、本稿では、《なる》を、いわゆる池上（1981）のいう〈なる〉的表現、すなわち個体を全体中心的に捉え、主体を明示しないことによって聞き手・読み手をより高い存在として位置付けるものであることを論じていく。とりわけ、主体の明示・非明示が〈する〉的表現・〈なる〉的表現の選択に関わること、「なります敬語」が尊敬語から謙譲語、さらには新丁重

語へとシフトしたものであること、そして敬語体系の心的距離と「なります敬語」の時間的な概念との間に時空間メタファー現象がみられることを考察する。

2. 《なる》の多義性

まず、「なります敬語」の「なる【生・為・成】」の多義性を『日本国語大辞典 第2版』（2003）をもとにまとめてみよう。

(1)

①【生】なかったものが、新たに形をとって現われ出る。

- ① 動植物が、新たに生じる。
- ② 草木の実ができる。みのる。

②【成・為】あるものやある状態から、他のものや他の状態に変わる。

- ① あるものから他のものに変化する。
- ② ある状態から他の状態に移り変わる。また、ある状態に達する。
- ③ その時刻や時期に達する。その時に至る。また、時が経過する。
- ④ ある場所やある高さに達する。

③【成】行為の結果が現われる。

- ① 物事ができあがる。やっていたことがしあがる。
- ② 望んでいたことが実現する。思いがかなう。
- ③ することができる。

④補助動詞として用いる。動詞の連用形や動作性の漢語名詞を、「お…になる」「ご…になる」の形ではさみ、動作主に対する尊敬を表わす。

『日本国語大辞典 第2版』（10:302-303）

《なる》には(1)のように、大きく分けて4つの意味・用法が備わっている。

①は自発、②は推移、③は可能、④は尊敬に該当する。黒滝（2022:98）でも論じたように、《なる》の文法化の過程において、「自発（出来事が非意図的に／無

意識的に／自然の成り行きとして実現されること)」と「出来」・「出現」が起源となる。そこから「自然発生的に無から有が出来ること」が表され、「あるものから他のものに変化する。ある状態から他の状態に移り変わる」といった「変化」・「推移」、そして「行為の結果が現われる」や「望んでいたことが実現する」、さらには「することができる」という「可能」の意味へと意味拡張していった。

①の「自発」は、自然の成り行きでそうなったことや事態の原因に言及しないことを表している。「生る」自体、自然発生的な意味を担う。例えば「実がなる」のような使い方がある。英語の emergence (出現) に相当する。

②の「推移」は、変化、移り変わりや時の経過など、時間を含む概念である。例えば「春になる」のような使われ方をする。時間の経過とともに新たな事態が発生することも表す。英語は“Spring has come.”のように spring という個体の推移を表すが、日本語の「春になりました」は出来事全体の推移、すなわち全体的状況の移り変わり¹を表す。すなわち、「推移」の《なる》は出来事全体が推移したことを表すことにより個体を目立たせない分、聞き手に対して押しつけがましさを示さないようにする配慮表現としても機能する。「変更します」というより、「変更になりました」ということで、「いつの間にか変更という事態になりました」を含意する。「結婚することになりました」も、何かの縁で自然に結婚することになったことを周囲の人たちに認めてもらう表現である。「明日休みにします」は動作主が責任をとって、動作主の主体性が出ているが、「明日休むことになりました」は「仕方なくそうなった」という責任逃れを表す。波線部のように、時間的な推移によって「言い訳」などが含意される場合もある。これも事態全体の推移を表すことによって派生した意味である。

興味深いことに、(1)の②は『日本国語大辞典』では【為】という漢字があらわれている。「為る(なる)」は「自然現象などが時間の経過とともに新たな事態をうむ」ことを表す〈なる〉的表現であるが、現代語で多く使われる「為す(なす)」は「ある状態・現象の起きたことやその存在がおのずと感じられ

る。ある状態になる。時間が経過する」ことを表す〈する〉的表現である。つまり、【為】においては、〈なる〉的表現から〈する〉的表現へと文法化する過程にあり、主観的把握（池上 2011）として捉えるか、客観的把握として捉えるか揺らぎが見えるといえよう。この「為」をめぐる主観的把握・客観的把握の揺れの詳細に関しては、今後更なる検討を重ね、別稿を期したい。

③の「可能」は、認知主体が背景化され場の中に埋没され、その場や状況の中で許されている状況可能を表す。例えば「ついに五連覇なる」のような例である。一見すると、外的状況が許せば起こり得る可能性（状況可能）を示す can²と似ているが、can は人間が自らの責任で自分の力で働きかけることを表すので、《なる》の「可能」とは本質的には異なる。

④の例には「お書きになる」「ご見物になる」などがある。「尊敬」も全体の中で捉えることで、動作主自らを目立たせない。日本語の敬語は誰から誰への行為かを曖昧にすることで敬意を払う言語形式であり、そのことは尊敬の《なる》が如実に表しているといえる。例えば「お世話になりました」の《なる》は、受身的ニュアンスで、「世話してもらおう」ことを全体として捉えている。

①の「自発」はヴォイス、②の「推移」は時の移り変わりとその結果を表すという意味でテンス・アスペクト、③の「可能」はモダリティというように多機能にわたっている。④の「尊敬」は、近代語になると「れる」、「られる」といった助動詞の語形が変わるので、その意味ではモダリティといえよう（黒滝 2022）。

黒滝（2022:98-99）でも述べられているように、(1)の①から④の《なる》の特徴は、認知主体が言語化されず明示されていない。認知主体が背景化され、その事態の中に埋没されるということである。これは、《なる》が事態を〈見え〉のままに言語化する主観的把握型であることを物語っている。また、主観的把握型の日本語の「自己のゼロ化」（池上2000）という特徴とも相通ずるものがある。《なる》は、動作主性（agentivity）が低く、動作主である人間が目立たず、個体というよりも全体で捉えることを表しているのである。背景化、つまり状況（場）に埋没され内在化された認知主体が移り変わる状況において、

動作主というよりも「体験者 (experiencer)」になっているといえる。

次に、敬語に繋がるのは、④の「尊敬」だけでなく、テンス・アスペクトを表す②の「推移」でもあることを述べる。

3. 尊敬語の《なる》と謙譲語の《する》

池上 (1981) も述べるように、〈する〉的表現の英語は事態の経過や因果関係を表すことに主眼を置くが、一方、日本語特有の〈なる〉的表現の《なる》は、ただ「どうなったか」という変化の結果や変化後の事態に主眼を置く表現である。従来、このような類型論が唱えられてきたが、本節では、日本語にも実は〈する〉的表現があることに着目し、「日本語は主体を明示化するか、非明示化するかで、敬語の中の尊敬語と謙譲語が区別される。その根本には、スル的とナル的の考え方の違いがある」ことを述べる。

まず、尊敬語である「お(ご) + V 連用形 + になる」をみてみよう³。

(2) お読みになる (読む)

お召しになる (着る)

お休みになる (寝る)

目上の人を敬う際、「お(ご) + V 連用形 + になる」形にすることによって、動作主の主体的意志によらず、自然発生的に状態が変化することが表される。これは、第2節で述べた②の「推移」に相当する。この場合、話し手はその状態の変化を体験する体験者となっているに過ぎず、誰から誰への敬意かを曖昧にすることで敬意を払っている。因みに、池上 (1981:199) は、“The Emperor ate.”を大変丁寧な敬語に翻訳すると「天皇陛下ニオカセラレマシテハ、オ召シ上リニナリマシタ」となること、そして、この日本語訳を直訳的に形式化すると“AT EMPEROR, □ BECOME TO EATING.”となることに言及している。さらに、「ここでは〈動作主〉であるはずの主体が〈場所〉化され、その

場所であたかも（主体なき）行為が生じているかのような形になっている」（池上 1981:199-200）と論じ、敬意の対象となる人物を明記しないのも敬意表現の一つであり、「お召し上がりになりました」のように「なる」が出てくるのはごく自然なことであることに触れている。池上の「あたかも（主体なき）行為が生じている」という説明は、上述の「動作主の主体的意志によらず」の意味と重なる。

尊敬語が「お（ご） + V 連用形 + になる」形で表されるのに対し、謙譲語の場合は「お + V + する」形になる。この場合、動作・行為の受け手を典型的な敬意の対象とし、受け手に対する授恩的な傾きを持っている（椎名・滝浦 2022:302）。

（3） お持ちします

お伺いします

お電話します

《する》は、意志を持つ個体である動作主（=主語）による他者への働きかけを表現する。人間が自らの責任で自分の力で働きかけ、主体的に行動することを表す actor-agent form なので、他動性を示す。《する》が他動詞的ゆえ、他者への働きかけを強調するのに対し、《なる》は「自ずから」を強調し自動詞的であり、動作主性が低い。動作主とのかかわりが無いことを暗示し、主語の無意志さ、それに伴って変化する状況全体を表す。池上（1981）は、《なる》の機能に関し、「電車が到着ニナリマス」の例文をあげ、「発言内容に対する発言者の関与（保証など）を暗示し、それに伴って生じるかも知れない責任の可能性を前もって排除しておくには〈なる〉的な表現にして、当事者の意図を越えたレベルでの事態という意味合いを含めておくのがもっともよいのである」（池上 1981:199）と指摘する。この指摘からも、《なる》は動作主とのかかわりが無いことを暗示することがわかる。よって、池上（1981:250-255）も論じるように、《する》は個体中心の捉え方を示し、《なる》は全体中心の捉え方を

示し、状態の変化を表す。そして、《する》は動作主が主体であり、《なる》は話し手が体験者ということになる。

近藤(2018)も、《する》と対比しながら《なる》の全体中心的な捉え方について、次のように述べる。

〈ナル〉型：〈動作主〉を背景化し、事態全体を眼前に出来する事態として捉えるタイプ。

〈スル〉型：〈動作主〉に焦点をあてた事態の捉え方で、事態に関与する〈動作主〉を言語化し、そこからの働きかけの視点で事態を捉えるタイプ。
(近藤2018:48)

元来、日本語の敬語体系は、聞き手が目上か目下かといった上下関係を話し手が判断し選択するものであった。敬語表現の選択に、発話内容や目的などは関与しないし、仮に聞き手への配慮だけを考慮に入れるならば、尊敬／謙讓の区別は不要であろう。それに対し、英語のポライトネスは、従来から今日に至るまで、聞き手とのインタラクションの中で親疎関係や心的距離の視点から捉えることに重きを置いてきた。

ここで、日本語の尊敬語と謙讓語を、英語のポライトネスの2つの概念(Brown & Levinson (1987), 以後B&Lと称する)⁴に当てはめると、次のようになる。すなわち、《なる》的な尊敬語は、動作主の意志性は含意せず、自然発生的な状態の変化を表すので、恩義せがましくない、他者のフェイスを脅かさないネガティブ・ポライトネスであり、《する》的な謙讓語は、話し手自らの意志で他者のために行う授与行為を表すので、他者の立場を尊重し、他者を積極的に評価しようという「ポジティブ・フェイスを保つ行為」すなわちポジティブ・ポライトネスである。

4. 「新丁重語」へとシフトした「なります敬語」

敬語はそもそも前近代までの身分社会の中で発達してきたといえるものであり、日本語研究史上、長きにわたって、ネガティブ・ポライトネス／ポジティブ・ポライトネスという2つの概念を基軸とする西欧のポライトネス理論とは縁遠いものとされてきた。日本では、明治以降でさえ、西洋の文明国の仲間入りを意識しながらも、「親しく交わる」ことよりも「礼儀正しくふるまう」ことが重視されていた。戦後民主主義になってようやく、上下関係に基づく「タテ」の敬語ではなく、親疎関係に基づく「ヨコ」の人間関係の中で親しさのコミュニケーションの必要性が公的に認められ始めたのである。

滝浦（2005:258）は、対面的相互作用における人のふるまいについて、普遍的な枠組みとしてのポライトネス概念によって、敬語の機能を分析している。そこでは、敬語を敬意の表現ではなく、距離化の表現とし、「敬語の使用は、対象人物との間に距離があること・距離を置きたいことを表現する行為であり、敬語の不使用は、距離がないこと・距離を置きたくないことを表現する行為である」（滝浦2005: ix）と述べられている。

敬語を距離化の表現と位置付けるのであれば、上下関係に基づく「タテ」でなく、親疎関係に基づく「ヨコ」の見地から敬語を捉え直す必要があるというわけである。そもそも「上下」と「距離」の関係は、R. Brown, and A. Gilman (1960) が以下指摘するように、「power (力)」と「solidarity (連帯)」の関係に対応する。

R. Brown らここには二つの関係軸、すなわち“ヨコ”の関係としての「連帯 (solidarity)」の関係と“タテ”の関係としての「力 (power)」の関係を読み取り、前者における対称性と後者における非対称性が、社会的人間関係と人称代名詞の用法との間で相似的であることを見出していた。ブラウン&レヴィンソンはそれを受け継ぎ、フェイス侵害度の見積もりの公式やポライトネスから見た文化の類型論などに応用していく。(滝浦2005:139-140)

対人的コミュニケーションの場面において、上下関係からみる敬語は話し手視点であるが、親疎関係からみるポライトネス表現は聞き手視点である。前者は素材敬語、後者は対者敬語といえよう。南(1987)によれば、素材敬語とは尊敬語・謙譲語・美化語で、対者敬語とは丁寧語である。敬意の向かう対象が異なり、素材敬語は話題の人物に対する敬意を表し、対者敬語は聞き手に対する敬意を表すという。

親疎関係に基づく「ヨコ」の人間関係の中で聞き手視点の表現の一つが「なります敬語」であると考えられる。つまり、上下関係でなく、ヨコとの距離のポライトネスと関わっているというわけである。この「なります敬語」は主体を前面に出さず、誰からの行為かを曖昧にすることで敬意を払っている。例えば、「おつりは50円になります」「こちらがその本になります」のように、聞き手の想定内にあることを確認しつつ謙虚さを示している。聞き手を意識しているという点では、素材敬語というよりも対者敬語といえよう。

この「なります敬語」は「マニュアル敬語」(井上 2017)とも呼ばれるものの一種である。「マニュアル敬語」とは、職場、特に接客の場面で使用する言語表現のことをいう。すなわち、「マニュアルで定められた多くの定型表現」のことであり、「バイト敬語」や「ファミコン敬語」ともいわれる。「マニュアル敬語」は従来の敬語のカテゴリーにない言い回しでもあるため、間違った敬語(=誤用)として非難され、敬語の乱れと捉えられてきた。しかしながら、井上(2017)は、「になります」や「よろしかったですか」などは婉曲表現で「気配り」を表していて、一概に敬語として誤用ではないと指摘する。この「なります敬語」が氾濫している現代語では、まさに「聞き手敬語化」や「敬語の丁寧語化」が起こっているといえよう。

「なります敬語」も敬語の一種と考えると、敬語は「話者と素材との相対的上下関係に基づく素材敬語」から「聞き手敬語としての対者敬語」へとシフトしているといえる。そもそも素材敬語と対者敬語の境界線が不明瞭になってきており、主観的把握型の日本語においては、両者が場の中で一体となり、単なる認知主体の表現意図を実現する傾向に向いているのかもしれない。そうなる

と、敬語自体は対人コミュニケーションの目的以外で使われることが多くなってきて、話題の人物への敬意を表す機能だけでなく、聞き手への配慮や丁寧さを表す機能を発揮することが多くなり始めていると考えられる。敬意でなく配慮や丁寧さを表すとなると、もはや日本語の敬語が英語のポライトネスのようになっているといえよう。その意味で、この新しい敬語表現である「なります敬語」は「新丁寧語」としての機能も担っていると一考する余地がある。

「なります敬語」の《なる》は、本来「である」で表されるものである。ただし、(4)の例のように、〈いま・ここ〉の場を指しているのだから、過去形はとらず「～になります」となる。まさに聞き手へ向けた発話である。

(4) こちらが紅茶で、こちらがハーブティーになります。

お会計はあちらになります。

「なります敬語」の《なる》は、認知主体としての話し手が、事態を〈見え〉のままに捉え、その事態の中に身を置き埋没する、いわゆる「主観的把握」のプロトタイプ（典型例）である。認知主体を明示しないことで、誰に誰からを曖昧にした上で敬意を払うのである。要するに、丁寧表現としての《なる》は個体を目立たせず、事態全体でそうなったことを表すことで、聞き手に対する押しつけがましさが緩和される。

また、この「なります敬語」が誤用・敬語の乱れと捉えられてきた理由は、誰から誰への敬意かが曖昧であるというよりも、「推移」を表すので、「変化」がみられない文脈では使えないということになるだろう。たとえば、「明日は雨天により遠足は延期になります」というように、何かが別のものに変化したり、今までと異なる状態になる場合に「なります敬語」が使えるのである。

第3節で尊敬語を表す「お(ご) + V連用形 + になる」形の〈なる〉的表現について述べたが、実は「なります敬語」に関しては、尊敬語から謙譲語、さらには新丁寧語へとシフトしたと考えられる。聞き手への意識が強くなればなるほど敬意は薄れる。尊敬語から謙譲語へのシフトはそれが要因である。さら

に、「なります敬語」は自分がへりくだる「新丁寧語」(椎名2021)という形で敬意を保持しようとするものである。

そもそも「丁寧語」は、敬語の5分類⁵の中の謙譲語に謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱがあるが、その謙譲語Ⅱに該当する。「自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの」と定義されている。つまるところ、「動作主体の卑下」すなわち「自己のへだたり」に相当する。自分を控えめにし背景化することによって、相手は前景化され、相手を立て、敬うことになる。謙譲語Ⅰは行為・ものごとの〈向かう先〉に対する敬語、謙譲語Ⅱの丁寧語は聞き手に対する敬語である(菊池 2022:19)。

また、第3節で述べたB&Lのポライトネス理論は話し手側のフェイスの概念を中心に論じられているが、アメリカの社会学者 Goffman (1967) は、聞き手視点で自己を焦点化し、コミュニケーションを「儀礼的相互行為」として捉え、話し手と聞き手双方のフェイス (face) を考慮に入れている。フェイスとは、話し手と聞き手が互いの自己について積極的に認知し合う、積極的価値のことをいう。このフェイスを保持する行為には他者指向的と自己呈示的の2面性があり、他者に対する評価によって敬意を表する他者指向性を「表敬」(deference) と呼び、自己をへりくだる自己呈示性を「品行」(demeanor) と称する。滝浦 (2022:87) は「この概念対を敬語の5分類と重ね合わせるなら、他者指向的な「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」は典型的な「表敬」の敬語であり、新たに分離独立された「丁寧語」「美化語」はどちらも「品行」の敬語である。ここ数十年の間に日本語に生じている現象は、「表敬」の敬語から「品行」の敬語へのシフトである」ことに言及する。

本稿では、「なります敬語」に関しては、従来の「丁寧語」ではなく、敢えて「新丁寧語」へとシフトしたと提言したい。その理由を以下で述べよう。

椎名 (2021) は、「新丁寧語」について「させていただく」を題材に以下のように説明する。

～～～こうした敬語的使用意識と〔必須性〕と〔使役性〕の有意性から、

「させていただく」の使用に込められているのは単なる「敬意」というよりも、「あなたへの意識・配慮」だと考える方が適切だろう。「させていただく」は、「あなた認知」（近接化ストラテジー）を丁重に表現する（遠隔化ストラテジー）という、遠近両方のストラテジーを用いた「新丁重語」への変化過程にあると言い換えることができる。（椎名 2021:208）

すなわち、椎名（2021:215）によると、「「させていただく」には元来、話し手が主語であるために聞き手に言及しなくてよいという敬避性があった。よって、遠隔化ストラテジーの性質を備えている。ただ、運用においては、聞き手の存在や関与が意識される動詞と共起し、この近接化ストラテジーの効果も加わっている。よって、従来の敬語が果たしてきた遠隔化に加え、近接化の機能も帯びたという意味で「新丁重語」と名付けた」と説明されている。

「なります敬語」は、話し手指向の尊敬語から、聞き手指向の謙譲語へ、さらに、自らを低く見せて聞き手を敬い、丁重に自らをへりくだって伝える自己呈示的な新丁重語へとシフトした。へりくだることにより、話し手自らは背景化され、場の中に埋没される。それによって、聞き手が前景化され、聞き手を立て、敬うことになるというわけである。まさに、「自己のゼロ化」を特徴とする主観的把握のプロトタイプの《なる》を使った「なります敬語」に起こっている現象であるといえよう。

5. 「なります敬語」と《なる》の文法化

前述したように、《なる》が表す「推移」とは、個体ではなく連続体すなわち全体的状況の移り変わりであり、状況が移り変わった結果としての現状を表している。例えば、「こちらが当店一押しのデザートになります」は「こちらが当店一押しのデザートです」と同様、単に「あたる、相当する」ことを表しているが、後者の「です」で表すよりも丁寧と捉えられる⁶。その理由を次のように考える。「になります」は、お勧め商品になるよう色々と試作してみた

結果のデザートであるというように、認知主体が時間の流れや変化のプロセスを体験していることを含意している。それによって、体験者としてその場にいる臨場感までは描かれているが、その認知主体が言語化されていない分、押しつけがましく捉えられない。

《なる》の中核的概念は emergence (出来, 出現) と transition (推移) である。《なる》を使った文では、行為者が話し手であっても、その話し手は明示されない。それによって、人間を排除し、「自然な成り行きとして出来」, 「自然生起としての出来」, すなわち「人為的営みをしない出来」が含意される。これが、前者の emergence (出来, 出現) である。一方、後者の transition (推移) は個体の変化ではなく連続体すなわち全体的状況の移り変わりであり、その移り変わった現在の状態の結果を含意する。

- (5) a. 来年の9月に留学します。
- b. 来年の9月に留学することになりました。

(5) a は単に留学という事態だけを断定的に示すのに対し、(5) b は留学によって、生活全体が移り変わり、その変化した周りの状況や風景までが背後にみえてくる。

transition (推移) の《なる》は、時間の流れによって対人関係を含めた状況の変化までを浮かび上がらせる。因みに、「ある」が空間の中に存在することを表すのに対し、《なる》は時間の流れを体験している認知主体がその場にいるという臨場感や体験を表している。要するに、時間の経過を話し手は体験しているので、時間の経過が言語化されることで話し手は変化のプロセスを体験的に捉えるのである。推移を体験し享受することで、「体験は状態をデキゴト化する」(定延 2008:33) とあるように、変化の結果や変化後の事態に重きを置くことができる。

したがって、「なります敬語」の《なる》も、[授与]には関与せず、むしろ認知主体が時間の流れや変化のプロセスを体験していることを表している。そ

ここでは、変化した結果・変化後の事態が示され、「推移」という時間軸を意識している。その意味ではアスペクトを表す《なる》といえよう。

時間軸上をどのように経過するのか、その方向性の違いによって、《なる》には2つの対照的な捉え方があることを池上(2022:2)は次のように述べている。すなわち、「春がなる」のように〈(Xカラ) Yガナル〉といった〈出現〉・〈完成〉を表すものと、「春になる」のように〈(Xガ) Yニナル〉といった〈移行〉・〈推移〉を表すものの2つの類型がある。池上(2022:2)によれば、トルコ語、モンゴル語、朝鮮語を含め、大陸の諸言語では前者の型の定着が認められるのに対し、日本語動詞《なる》は後者の型への偏向が著しいという。

さらに、池上(2022:3-4)は次のように説明する。Xは〈起点〉(source)における事態、Yは〈到達点〉(goal)における事態で、《なる》という語彙項目によって変化の過程が表示されている。その変化の過程を経て、何か新しい存在が出現したり、異なる状態へ推移・移行する。このような事態の過程が話者によって言語化される場合、〈(Xカラ) Yガナル〉のXは起点でYが話題(topic)になり、一方、〈(Xガ) Yニナル〉のXは話題でYが到達点になる。そして、日本語の《なる》は後者の方への偏向が著しいという(池上2022:4)。

すなわち、人間の認知の営みにおいては、〈起点〉に対する注目よりも〈到達点〉に対する注目の方が優先的、ないしは優位に働くとして、池上(1981:122-146)は'the goal-over-source principle'に言及している。これは、我々が起点となる目に見えないものよりも、目の前に現存しているものに関心を抱く本能的傾向が強いからであろう。以上は共時的な傾向であるが、通時的に見ても、池上(2022:11)が述べるように、〈出現〉を意味する〈(Xカラ) Yガナル〉型の「〈起点〉言及型」が衰退し、〈移行〉・〈推移〉を表す〈(Xガ) Yニナル〉型の「〈到達点〉言及型」に吸収されていったので、〈到達点〉に対する注目の方が優先的、ないしは優位に働いているといえる。

第2節で《なる》の多義性に触れたが、〈出現〉は「出来」に、〈推移〉は「変化」に相当する。《なる》の文法化過程は、[出来→出来/変化→変化]であり、移行期には[出来]と[変化]が共存している時期もあるが、やがて

[変化] すなわち〈推移〉が主流になったのである。以上から、「なります敬語」の《なる》は「〈到達点〉言及型」であり、〈推移〉を表すと考える。

因みに、「になります」と「となります」の違いは何なのであろうか。「こちらは今夏一番流行るデザインになります」は〈推移〉を表しているが、「こちらは今夏一番流行るデザインとなります」となると、《なる》の〈出現〉が強調されると考えられる。池上(2022:9)も「「～になる」は〈無徴〉(unmarked), 「～となる」は〈有徴〉(marked)である」と述べている。よって、(2)の例で挙げた「お読みになる」「お召しになる」「お休みになる」を「お読みとなる」「お召しとなる」「お休みとなる」とするのは〈有徴〉の場合ということになる。

6. 《なる》にみられる〈時空間メタファー〉

前節で「なります敬語」の《なる》を「推移」という時間軸上で捉えてみた。滝浦(2005)はB&Lのアプローチを援用し、敬語を距離の問題としてきたが、本稿では、実は日本語の敬語表現は距離という空間軸上ではなく時間軸上で捉えられるものであることを述べたい。

英語には“I was wondering if you could do me a favour? (頼み事を聞いていただけませんか)”というように過去進行形を使って、「今ここ」から遠ざかることで敬意を示す表現がある。これは、距離を置くという空間軸から、今頼みたい思いという時間軸に焦点をあてた捉え方になっている。ここには、空間から時間へのメタファー現象がみられる。

「新丁重語」である《なる》にも、be going toのような、空間から時間へのメタファーが起こっていると考えられる。従来、未来を表すbe going toは、時空間メタファーという通説によって説明されてきた。例えば、I'm going to school to take an exam. は「試験を受けるために通学するところです」というように、現在進行形で「～へ行く途中」を表し、試験を受けるために、学校という目的地向かっているといった空間移動を示していた。それは、動作主の時間軸上における物理的な移動を表す動詞goの進行形がプロファイルされ、

その移動を引き起こす要因が主語の意志や社会的圧力にある。その場所的な捉え方が、やがて「試験を受けることを目指して移動中である」というように、試験を受けることを予め意図していたことが表され「試験をこれから受けようと意図している」という意志の意味が現れる。やがて、意図性が弱まり、「学校に行って試験を受けることになる」という「推移」も表されるようになる。さらに、文法化が進むと、人間以外の主語で使われるようになり、抽象的文法化の帰結としての「この分だと～しそうだ(でしょう)」という未来時への予測を表すようになる。空間における移動が未来時という時間へとメタファーが起こったことがうかがえる。

「新丁重語」である《なる》においても、文法化の起点である「出来・出現」は認知主体が明示されず背景化され、その事態の中に埋没されるというように空間的な捉え方がなされてきたが、「なります敬語」の《なる》は「推移」を表し、「推移」は時間的な概念であるので、ここにも時空間メタファー現象がみられると考えられる。最後に、日本語の敬語表現には時間軸上で捉えられる可能性があることに触れてみた。

7. おわりに

本稿では、日本語にも「敬って距離を置く」表現だけでなく、「共感し配慮する」表現もあり、その一つの「なります敬語」を取りあげた。《なる》の没主体という特徴により、「なります敬語」は、尊敬語から謙譲語、さらには丁重語へとシフトした。まさに、「聞き手認知」とでもいうべき聞き手への配慮を表す現代の丁寧マーカー、すなわち「新丁重語」(椎名2021)と称するに相応しいことを論じた。聞き手への意識が強くなればなるほど敬意は薄れる。尊敬語から謙譲語へのシフトはそれが要因である。さらに、自らがへりくだる丁重語という形で敬意を保持しようとするというわけである。「なります敬語」は、話し手自らがへりくだり控えめにし背景化されることによって、聞き手は前景化され、聞き手を立て、敬うことになるという意味で「新丁重語」であると提言した。

この「なります敬語」の《なる》は、[授与]には関与せず、むしろ認知主体が時間の流れや変化のプロセスを体験していることが含意されている。この場合の《なる》は、変化した結果・変化後の事態を示し、〈推移〉という時間軸を意識したアスペクト的なものになっている。また、《なる》の文法化の過程は、[出来→出来／変化→変化]であり、移行期には[出来]と[変化]が共存している時期もあるが、やがて[変化]すなわち「推移」が主流となる。この言語現象の証左として、人間の認知の営みにおいては、〈起点〉よりも〈到達点〉に注目する傾向が強いこと('the goal-over-source principle' 池上1981)、そして時空間メタファー現象がみられることを挙げた。したがって、「なります敬語」の《なる》は「〈到達点〉言及型」であり、〈推移〉を表すというわけである。ここで、「なります敬語」はB&Lの心的距離といった視点からみた配慮表現とは異なることを付言しておきたい。

本論の冒頭で、メールの文頭の「お世話になっております」という挨拶文に触れたが、日頃からお世話になっている相手に対して、何度もメールのやり取りをする場合、その都度「お世話になっております」を使うのは好ましくないことが本稿で明らかとなった。その理由は、「なります敬語」の《なる》は本来「推移」を表すので、変化・推移のない情報をメールで伝える際、常套句として「お世話になっております」と始めるのは好ましくないからである。

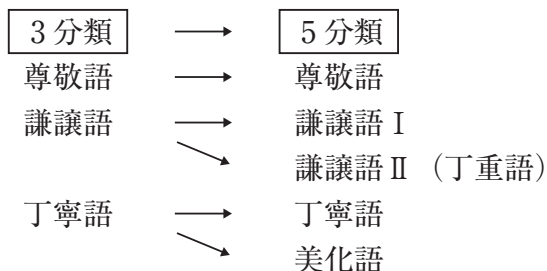
「なります表現」は従来敬語としてカテゴリー化されてこなかった。それは、従来の敬語研究が、社会的上下関係や年齢差に基づいたタテ社会であることを基盤に話し手から聞き手(間接的には話題となる人)への敬意を示すものとしてしか研究されてこなかったからである。しかしながら、社会の変貌と共に人間関係も多様化される昨今では、敬語のあり方を見直すべき「秋」が今まさに来ている。その意味では、日本語もヨコ社会のインターアクションで聞き手指向的な配慮表現がどのように選択されているかといった、新たな敬語の実態を探っていくことが今後の課題となろう。

注

1. 〈個体への注目／全体的状況へ注目〉という対立については池上 (1981:249-283) を参照。
2. Leech (1987:81-82) は、例文 “The road *may/can* be blocked.” を取り上げ、「may は現実的根拠に基づき出来事が現実にかかる可能性を話し手が判断することを表すという意味で現実的可能性 (factual possibility), can は理論上、考えられ得る出来事を描写するという意味で理論的可能性 (theoretical possibility) を表す」と比較している。すなわち、can は理論的に “possible/impossible” と二項対立で判断する可能性を表す。さらに、Ehrman (1966) は、この can に対し “nihil obstat” (nothing prevents someone from…) という表現を用い、「主語の行動の自由を妨害するものは外部の状況の中には何も存在しないのでそれができる」と説明する。よって、can は外的状況が許せば一般的に起こり得る一時的な可能性、すなわち「状況可能」を表す。
3. (中世以降、動作を表す名詞に付いて) 非常に高い敬意を表す。…なさる。…になる。(例) 法皇、夜を籠(こ)めて、大原の奥へぞ御幸—・る〈平家・灌頂〉
4. 英語には人間関係を円滑にするためのストラテジーとして、心的距離に関わる「ポライトネス・ストラテジー」がある。(Lakoff 1975, Leech 1983, Brown, P. and S. Levinson 1987)

Brown & Levinson (1987) の「ポライトネス理論」には、聞き手のフェイスを侵害する行為 (FTA: face threatening acts) を和らげるストラテジーとして、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスがある。ポジティブ・ポライトネスとは、「承認されたい、よく思われたい」というポジティブ・フェイスに配慮するもので、具体的には褒めたり、タメ語や直接的表現を使って、聞き手への共感や仲間意識を伝え、聞き手との心的距離を縮めようとするものである。一方、ネガティブ・ポライトネスとは「邪魔されたくない」という欲求 (ネガティブ・フェイス) に配慮して用いられるストラテジーで、具体的には、間接的に述べたり、謝罪したり、聞き手に選択権を与えたり、聞き手への負担を軽減するストラテジーである。すなわち聞き手との心的距離を遠くに置く言語行為である。つまるところ、B&L の唱えるポライトネスは聞き手との心的距離の視点から捉える配慮表現ということになる。

5. 2007年の文化審議会答申「敬語の指針」(文化審議会 (2007)) によって、現代日本語の敬語は「3種類 (尊敬語・謙譲語・丁寧語)」から「5種類 (尊敬語・謙譲語 I・謙譲語 II (丁寧語)・丁寧語・美化語)」になった。ただし、「敬語の指針」は「指針」の語が示すように、敬語を5分類して使い分けることを強制するものでないことを付記しておきたい。



(「敬語の指針」 p.13)

6. 「こちらが当店一押しのデザートでございます」といった「特別敬体」もあるが、通常「バイト言葉」というとカジュアルなレストランなどでバイトする際のマニュアル上の言葉を表しているの、ここでは取り上げないこととする。

参考文献

- 池上嘉彦 (1981) 『《する》と《なる》の言語学』大修館書店。
 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社。
 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』49-67. ひつじ書房。
 池上嘉彦 (2022) 「言語横断的に見た日本語動詞「なる」の生態 (中間報告)」『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集』2-15. 開拓社。
 井上史雄 (2017) 『新・敬語論 なぜ「乱れる」のか (NHK 出版新書508)』NHK 出版。
 菊池康人 (2022) 『「敬語の指針」についての覚書と、もう一つの敬語分類案』『敬語の文法と語用論』近藤泰弘・澤田淳 (編) 17-58. 開拓社。
 黒滝真理子 (2022) 「可能表現の発達に否定概念は如何に関わってきたか」『認知言語学研究』Vol.7. 93-110. 日本認知言語学会。
 近藤安月子 (2018) 『「日本語らしさ」の文法』研究社。
 定延利之 (2008) 『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話—』ちくま新書。
 椎名美智 (2021) 『「させたいいただく」の語用論—人はなぜ使いたくなるのか—』ひつじ書房。
 椎名美智・滝浦真人編 (2022) 『「させたいいただく」大研究』くろしお出版。
 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討—』大修館書店。
 滝浦真人 (2022) 「なぜいま敬語は「5分類」になったのか?—日本人の敬語意識に起きていること—」『敬語の文法と語用論』近藤泰弘・澤田淳 (編) 59-89. 開拓社。
 南不二男 (1987) 『敬語』岩波書店。
 Brown, R. and A. Gilman (1960) “The Pronouns of Power and Solidarity,” in T. Sebeok (ed.), *Style in Language*. M.I.T. Press, pp.253-276.
 Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.
 Ehrman, M.E. (1966) *The Meaning of the Modals in Present-Day American English*. The Hague: Mouton.
 Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*, New York: Anchor Books, Doubleday and Company Inc. (広瀬英彦/安江孝司訳2002『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』法政大学出版.)
 Lakoff, R. (1975) *Language and Women's Place*. Harper & Row. (かつえ・あきば・れいのるず訳1985) 『言語と性—英語における女の立場』有信堂高文社)

Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.

Leech, G.N. (1987) *Meaning and the English verb*. 2nd, Longman. London/New York.

引用文献

『日本国語大辞典 第二版』(2003) 小学館

文化審議会 (2007) 「敬語の指針」